学校経営方針を核にした、指導目的を共有する生活指導

加東市立東条西小学校
主幹教諭　中山　庸平

1　取組の内容・方法

(1)　学校の概要と児童の実態

本校は、児童数約 50 名の小規模校である。少ない人数だからこそ、普段から異学年と関わる機会を設け、縦割り班活動も盛んに行ってきた。休み時間には学年関係なく遊んでいる姿が多く見られ、低学年の児童が高学年と一緒におにごっこやサッカーをしている。児童は全校生の名前を覚えていて、低学年が高学年を慕い、高学年はやさしく声をかける関係性が築かれている。児童数減少とともに問題行動の件数も減ってきている。規律を逸脱するような行為がほとんどない反面、少人数ゆえに自主性・自立性が乏しいことが数年来の課題であった。

そんな児童たちに学校の誇りを尋ねると、「開魂園（かいこんえん）」と「全校群読」と答える。開魂園とは学校所有の里山で、さまざまな学習のフィールドとして活用している。春には、１～３年生が開魂園に竹の子掘りに出かける。３年生がリーダーとなり、１年生に一生懸命に掘り方を教えたり、力を合わせたりしている姿が微笑ましい。全校群読は 14 年間続いた誇りである。毎年、秋に保護者や地域の方へ群読を披露してきた。

【開魂園】

(2)　児童の自主性を伸ばす指導

教職員は、「全職員が全校生の担任」という意識で日々の教育活動を行ってきた。上記の児童の実態を踏まえ、生活指導の目標に『自主性』のキーワードを据えて取り組んできた。年度当初に教職員で以下のことを共通理解できるよう提案した。

①児童が「なぜ」と考えられる指導を継続する。決まりを守らせることも大切だが、決まりの必要性や意義を考えさせる。児童自身が自立した行動ができるようにすることに重点を置く。

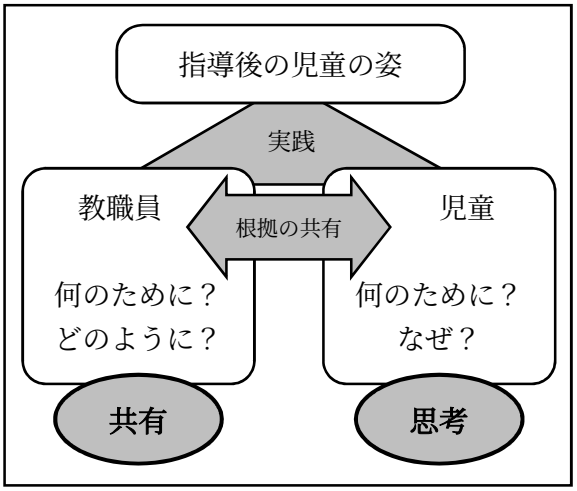
②学年が上がるにつれ、支援の手厚さを緩めていく。手はかけずに、目は離さない。できているかどうかの確認をする。そして、できたら褒める。

③目的を明確にした生活指導を目指す。

(3)　指導目的を明確に

教職員が指導の目的（自主性・自立性を育てる）を共有し、児童にも指導の根拠を分かりやすく伝えることを心がけた。１つの事例を紹介する。

本校では、ノーチャイムを実施しており、５分前行動を指導してきた。集団下校のときは下校時刻の５分前に集合することが慣例となっていて、担当の職員が簡単な話をしてから挨拶をして帰る。ところが、いつの間にか「集合場所に来たら、しゃべらずに静かに待つ」ことが目的になってしまった。職員にその意識があるので、話をするときに「今日の集合のときも静かにしていない。」と、注意する日が多くなっていた。児童も注意されて帰るのとそうでないのでは、気分に大きな違いがある。そこで、指導の目的を『時間内に地区ごとに整列して座ること』として共有した。この目的に焦点化すると、集合場所で「児童の話し声が聞こえた」という指導は意味がなくなる。担当の職員が前に立ったときに静かにして、その日にあった楽しい話を聞いて下校する。児童が何のために整列するのか（静かに整列して待つ指導は、別の場面で指導すればよい）を整理共有する。このように、様々な場面で、何のために指導するのか、その根拠となるものを明確にすること、さらに学年に応じて児童と一緒にその根拠を考えていくことを大切にした。



【指導目的の明確化のイメージ】

その他に、下校時のもう１つの取組として、挨拶の改善がある。児童の代表が全校生の前で、簡単な話をして「さようなら」の挨拶をする取組を長年続けている。しかし、前に出る児童の言葉が定型化してしまった。それを数年前から自分の考えた言葉で語ってから挨拶するようにしていった。はじめは、天候や体調のことに関連させて語ることが多かった。そうすると、やはり同じような話になるのは想像に難くないだろう。それでは「自主性」は育たない。まず、職員の話の内容を「注意」ではなく、その日にあったことや近況の話に変える。児童は、その話を受けて話の内容を考えるようにしていった。根気よく続けることで、徐々に自分の言葉で語れる児童が増えてきた。

(4)　学校経営方針を合言葉に

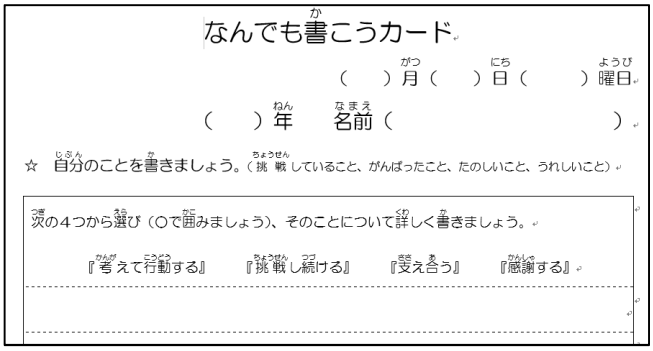
前述した「開魂園」は、「学ぶ場・遊ぶ場・働く場・念じる（思う）場」とする『子どもたちの魂を開く（開魂）道場』のような存在として、昭和８年に開墾して開設された。時代の移り変わりとともに意味は変わっても、『開魂』は本校の校是として引き継がれている。この『開魂』の精神を受け継いで、伝統的に『自らを拓く』（３つの拓く）ということを学校教育目標として掲げてきている。

本校の「めざす児童像」
〇まじめに責任を持って取り組む子（＝力を拓く）
〇思いを適切に表現できる子（＝心を拓く）
〇自主的に考え判断できる子（＝目を拓く）

学校長は、これらを児童に分かりやすく具体化して、４つの目標にして示してきた。今年度は、『考えて行動する』『挑戦し続ける』『支え合う』『感謝する』である。指導目

的を共有するために、全職員で共通理解したことがある。それは、学校経営方針で示された「めざす児童像」を全職員が発信することである。全職員が学校生活のあらゆる場面で、この具体目標を指導の根拠にして児童に語ってきた。根拠となるものを明確に共有することで、全職員で一貫した指導ができることを実感している。

自主性を伸ばす指導、目的を明確にした指導、学校経営方針を根拠にした指導、これらを共通理解し地道に積み重ねることで、いじめや不登校等の未然防止、早期発見につながる生活指導を目指して取り組んだ。昨年度の反省から、「めざす児童像」の４つをより具体的に評価するために、毎月の児童アンケートにも反映させて、児童自身に振り返らせている。児童自身が具体的に振り返ることで、具体像を明確にして評価できると考えている。


なんでも書こうカード

（　　）月（　　）日（　　）曜日

（　　）年　名前（　　）

☆　自分のことを書きましょう。（挑戦していること、がんばったこと、たのしいこと、うれしいこと）

次の４つから選び（○で囲みましょう）、そのことについて詳しく書きましょう。

『考えて行動する』　『挑戦し続ける』　『支え合う』　『感謝する』

【毎月の児童アンケート】

(5)　全校群読の取組

生活指導とは直接関係ないが、自主性を伸ばす取組として実践してきたことを紹介する。それは、児童の誇りの１つ「全校群読」での実践である。前述したように今年で14年目になるが、４年前の11回目から児童が主体的に関わる形に変えた。それまでは、教師主体で学年ごとに練習及び指導を行ってきており、その過程を受動的に捉えている児童が少なくなかったからである。そこで、６年生を中心に児童が群読に対して、主体的に活動できるように練習計画を立ててきた。

今年度は、次のような流れで群読を作り上げた。

① ６年生で作品を読み込む。（約１ヶ月半前）
② ６年生が１～５年生に、自分たちの思いを伝える。（約１ヶ月前）
③ 台本を４つに区切り縦割りの班を編成し、班ごとに６年生をリーダーにして練習をする。
④ 本番の２週間前から全校練習を行う。
⑤ 全校練習前に６年生代表から、その時間の練習目標を発表する。

このことにより、自分たちの力で作り上げた「群読」として、誇りに思う気持ちがさらに強くなったと感じている。

【６年生の思いを伝える様子】

2　取組の成果

(1)　合言葉のように

『考えて行動する』『挑戦し続ける』『支え合う』『感謝する』

４つの具体目標は、児童も教職員もいつでも諳んじることができる。それだけ事あるごとに伝え意識してきた成果である。些細な問題行動がなくなったわけでもいじめの認知件数がゼロになったわけでもない。しかし、その指導の過程で全職員が４つの目標を根拠に児童に考えさせる指導ができた。委員会活動等で児童が生活面での目標を発信するときも、その根拠を明確にして自らが主体的に考え発信するようになった。全校群読の練習では、リーダーの６年生が目標を達成できるよう、職員はほぼ関与しなくとも、事前に練習内容を打ち合わせしている姿が見られた。そのような児童の姿こそが、指導が具現化されてきた成果であろう。

(2)　下校の挨拶

ある日の低学年の下校で職員が児童に、学校の自慢は何かを聞いた。児童はすかさず、「開魂園」と「全校群読」と答えた。その話を受けての代表児童の挨拶は、「東条学園でも学校の自慢を見付けましょう。」だった。同じ日の高学年の下校である。代表児童は「東条学園でも目標をもってがんばりましょう。」と挨拶した。偶然のように感じるが児童にとってはこれまでの取組の必然であろう。児童の下校挨拶は、職員も毎回、児童が何を言うか楽しみにしている。児童の下校後、その挨拶をもとにして、管理職を筆頭に職員室で会話が弾むのである。そんな職員集団が素敵だなと感じる。

3　課題及び今後の取組の方向

ある職員が下校で、次のような話をした。

「なんでも書こうカード（毎月の児童アンケート）に、『支え合う』と『感謝する』について書いている子が増えた。今までは、『考えて行動する』や『挑戦し続ける』がほとんどだったが、意識が変わってきたんだなと感じた。最後となるこの東条西小学校に感謝の気持ちを込めて生活していることが嬉しい。」

本校は、令和３年３月に閉校する。地域の２小１中が合併し、４月から新しい学校「東条学園」が開校する。児童は他の学校の児童と一緒に学校生活を送ることになる。東条学園の校訓・学校目標も決まっている。児童が安心して新しい学校生活を送れるよう、これまでの取組同様に管理職のリーダーシップのもと、学校経営方針を核に、指導目的を共有した生活指導を浸透させていきたい。

本校は地域から随時、児童の様子に関する情報を伝えてもらう文化がある。その中で多いのが、児童の「あいさつ」に関することである。そこで、『感謝する心』を具体化させる方法の１つとして、地域の方に気持ちのよい挨拶をすることで感謝を伝えようと指導しきた。校区も広くなり、地域との連携も密にしていく必要がある。児童が地域とつながることも連携として大切であると考える。今後も児童の様子を地域や家庭と共有することを大切にし、普段から地域・家庭と連携を深め、未然防止はもちろん、早期発見・早期対応に努めていきたい。